

日本経済新聞

知識と行動が運命変える がんのリテラシー向上を



当連載「がん社会を診る」は2014年4月に始まり、丸12年を迎えました。こんなに長く続くとは思っていませんでしたが、幸い多くの方から「いいね」の言葉もらっています。学校でがん教育が始まった今、「大人のがん教育」の必要性が高まっているからでしょう。

がんはわずかな知識と行動（がんリテラシー）で運命が変わる病気です。原因不明の難病の前にはヘルスリテラシーも無力ですが、がんは知ることによってコントロールできる病気です。

ところがヘルスリテラシーの国際比較をみると、トップはオランダ、ドイツが3位で、日本はミャンマーやベトナムより低い最下位に甘んじています。日本人の低いヘルスリテラシーが、がんによる不幸の大きな要因だと思います。

そんな思いから3月13日、東京大学の安田講堂で「大人のためのがんセミナー」を開催しました。千人近い参加者でほぼ満席の盛況でした。

一緒に登壇したのは恩師で解剖学者の養老孟司先生と、友人で俳優の橋爪淳さん。自身のぼうこうがんを含め、養老先生の肺がん、橋爪さんの大腸がんも診断したのは私です。

セミナーの冒頭に「知っておきたいがんのすべて」を30分、お話ししました。次に、お二人のがんの診断と治療の経緯を短く解説しました。その後、お二人に思いを語っていただきました。

橋爪さんは病院嫌いで、大腸がんと気づきながらもオムツを着けて大河ドラマの収録に臨んだそうです。相談を受けた時点ではかなり進行していましたが、手術は成功し、その後も順調です。

養老先生は右肩の痛みがきっかけで、肺がんのなかでもタチの悪い（5年生存率1割程度）小細胞肺がんと診断されました。当初は「治療はテキトーでいい」とおっしゃった先生ですが、結果的には抗がん剤も放射線治療も受けています。

25年に左肺とリンパ節に再発してしまいましたが、免疫チェックポイント阻害剤が著効し、がんは消えています。橋爪さんと同じく医療に否定的だった養老先生もまた、標準治療を受けて、順調な経過です。最後の鼎談（ていだん）では、病気が生き方をどう変えるか、ヒトだけが持つ長い老後の意味などを3人で語り合いました。

私事ですが、東大の常勤職を3月末日に卒業しました。東大病院での診療は続けますし、今後は特別顧問として後進の指導にも当たるので、実質的には何も変わりません。13年目に入った「がん社会を診る」を通じて皆様ががんリテラシーを高め、この国民病に備えていただけるよう、発信を続けます。

2026年4月1日